

受験番号						氏名	
------	--	--	--	--	--	----	--

# 国 語

( 100 点 )  
( 50 分 )

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は 17 頁ある。試験開始後、頁の落丁・乱丁及び印刷不鮮明、また解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
3. 監督者の指示にしたがって、解答用紙の該当欄に以下の項目をそれぞれ正しく記入し、マークせよ。

(1) 受験番号欄

受験番号を 5 ケタで記入し、さらにその下のマーク欄に該当する 5 ケタをマークせよ。(例) 受験番号 20025 番 → 

2	0	0	2	5
---	---	---	---	---

 と記入。

(2) 氏名欄

氏名・フリガナを記入せよ。

4. マークシートについて

- (1) 受験番号が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- (2) 解答は、解答用紙の注意事項をよく読み解答欄に H B 鉛筆で正確にマークせよ。  
例えば 

20
----

 と表示された問題の正答として ④ を選んだ場合は、次の(例)のように解答番号 20 の解答欄の ④ を濃く完全にマークせよ。薄いもの、あるいは不完全なものは解答したことはない。

(例)

解答番号	解 答 欄
20	① ② ③ ● ⑤

- (3) 解答を修正する場合は必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色や消しくずが残ったり、 のような消し方などをした場合は、修正したことになる。
5. 試験終了後、問題冊子および解答用紙を机上に置き、試験監督者の指示に従い退場しなさい。



## 第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点50)

<sup>A</sup>慢性痛はなぜ生じるのだろうか。慢性痛についてはさまざまな研究が存在するが、本論で注目したいのは、熊谷晋一郎による慢性痛の経験とその解釈である。

熊谷は、自身が小児科医であると共に、脳性マヒの当事者である。脳性マヒとは、<sup>7)</sup>タイナイあるいは出生時や乳幼児期において何らかの原因で脳の運動を司る領野が損傷し、運動制御の発達に問題が生じる障害である。脳性マヒそのものは進行することはないが、年齢を経るに従って運動障害から派生する二次障害、たとえば、筋骨格の変形やそれから生じる疼痛、疲労、脊髄損傷、運動能力の後退などを被ることがしばしばある。カレイ<sup>(1)</sup>による問題も、健常者よりも早く生じやすい。熊谷は、最近の論文の中で、自身が慢性痛に襲われた経験を報告している。

熊谷の慢性痛は、彼が自分に二次障害が生じているのではないかと思った直後に生じた。ある朝起きると、首筋と左腕に電気が走るような鈍痛を突然感じた。最初は疲労から来るいつもの痛みであろうと無視したが、痛みは日に日に重くなり、痛みのせいで動きたくなくなった。痛みの原因は不明であったが、脊髄損傷の可能性を危惧<sup>4)</sup>した熊谷は、もしそうであれば、この痛みは重大な二次障害の兆候であり、直ちに外科手術が必要だと考えた。そこで、検査に病院に向かい、手術の可能性を医師に尋ねた。しかし最初にかかった医師はどっちつかずの態度をとり、熊谷の様態が悪化するかどうか様子見をしているようだった。熊谷は焦り、即座に脊髄損傷を回避する外科手術が必要かどうかを知りたかった。熊谷は、その医師が難しい外科手術を躊躇<sup>5)</sup>しているのではないかとさえ疑った。そこで彼は病院を変え、真剣に診てくれる信頼できる医師に出会った。新しい主治医は、熊谷の不安や疑念に真剣に耳を傾け、さまざまな検査を行った上で、脊髄損傷の可能性はないとはっきりと示してくれた。熊谷はこの主治医の言葉を信じ、自分が身体を動かすたびに痛みが生じて、それを恐れなくなった。しばらくすると彼の疼痛は消えていった。

熊谷の分析によれば、彼の慢性痛が消失したのは、世界に対する信頼が回復したからである。世界に対する信頼が回復したの

は、彼が脊髄損傷の可能性を恐れて、動作を控えていた状態から立ち直り、世界と身体的にやりとりできるようになったからである。こうした世界への信頼は、最終的に新しい主治医への信頼を通して獲得された。それは、主治医の真摯で共感的な患者への関わりからもたらされた。

では逆に、なぜ慢性痛は生じるのだろうか。熊谷は、慢性痛とは一種の記憶だと指摘する。それは、損傷を受けた無力な過去の自分についての記憶であり、何らかの心理的な問題のせいであらう、その記憶を忘れることができないのである。慢性痛は、身体が新しい環境に適応し、自分を更新したときに消失する。つまり、慢性痛は、幻肢と同じように、身体図式の機能不全に起因する。

身体図式について説明しよう。身体図式とは、まずは全身の感覚と運動の地図のようなものとして理解してよい。しかしそれは、単なるイメージのようなものではなく、さまざまな感覚と運動の過程が全体として共同して働くダイナミックなスキーマのことであり、私たちが世界の中の対象へと向かう身体的な志向性を担っている。たとえば、ひとつのリングを食べるという志向的な行為にせよ、そのリングを首や肩、眼球を調整してしっかりと見つめ、腕や手の位置をリングの方向に合わせて合わせ、適切な角度で手を伸ばし、滑らないように指の力を加減しながら、形状に合わせてリングをつかみ、口にもっていかねばならない。こうしてリングを口に運ぶにも、身体のままさまざまな箇所の感覚と運動をシステムティックに連動させる必要がある。人間が簡単にこなしている一見「単純な」動作がいかに難しいかは、ロボットで同じ動作を実現するのに、工学者たちがどれだけ苦労しているかを調べるとよいだろう。

こうした全身の協調行動を司るのが身体図式である。身体図式があつてはじめて、私たちは自分の身体自身についての感覚を位置づけることができるし、自分の運動を制御することができる。身体図式を通じて私たちは周囲の環境に適応していく。新しい環境に適応するには、身体図式を更新して、その組織の仕方を変化させなければならない。幻肢とは、手足を失ったにもかかわらず、イゼンとしてその身体部位があつた場所に感覚を覚える誤知覚をいう。たとえば、肘から先を失った患者の切断面に触れると、以前は腕がのびていた空虚な場所に痛みを覚えるなどする。幻肢は突然に手足を失った多くの人に生じる現象

である。手足を失った新しい状態に適應できず、以前の身体的習慣が残存することによって幻肢は発生する。言い換えるならば、**a**、感覚が誤って以前の状態に位置づけられたままになってしまうのである。(注<sup>2</sup>)メルロ＝ポンティは幻肢を「認めまいとする、暗々裡の否認にほかならない」として以下のように説明しているが、これは熊谷による記述を彷彿させる。(注<sup>3</sup>)

腕の幻影肢をもつとは、その腕だけに可能な一切の諸行動に今までどおり開かれてであろうとすることであり、切断以前にもっていた実践的領野をいまもなお保持しようとすることだ。身体とは世界内存在の媒質であり、(注<sup>3</sup>)身体をもつとは、或る生物体にとって、一定環境に適合し、幾つかの企てと一体となり、そこに絶えず自己を参加させてゆくことである。

幻肢は、習慣となった身体図式が現状に合わせた姿に更新されないことによって生じる。では、なぜ、患者は、傷ついた身体に合わせて新しい身体図式を再生できないのであるだろうか。実は、幻肢を生じやすい人とそうでない人がいる。前者の人たちは、一言でいってしまうのなら、自分の傷ついた身体を心理的に受け入れられないでいる人である。したがって、幻肢とは、心理的メカニズムとしては臨床心理でいう「**b**」の一種として解釈できる。**b**とは、ある人が自分の願望が成就できないにもかかわらず、その願望を放棄もせず、無意識の中に押さえ続ける態度のことである。それは不可能な未来をいまだに手放さない態度である。したがって、身体図式は、生理学的な側面だけではなく、心理学的な側面をもっている。その人の心理的な態度、あるいは、生活全体に関わる態度が、身体図式の形成や再形成に大きく影響する。

慢性痛も、幻肢の問題と同じく、身体図式が更新されないという問題から生じている。慢性痛は、幻肢の一種だとさえ言えよう。(注<sup>4</sup>)コールの著作の中には、ボブという脊髄損傷の患者が登場する。

ボブは、かつては屈強な軍人であり、男らしいウインドサーファーであり、たくましい肉体に対する誇りを具現したような男性だった。しかし、事故による脊髄損傷で、かつてのような肉体と運動力を奪われたボブは、つねに車イスに乗らねばならないほどではないが、かといって、自力でしっかりと歩けるわけでもない状態になった。そして、彼は、ひどい慢性痛に苦しめられ

た。ボブは、以前のような活動的な人間でもなく、かといって重度の障害者というアイデンティティも得ることができない。彼は自身を中途半端な存在だと見なしていた。さらに悪いことに、ある程度自力で歩くことができるため、そのことが、自分の身体がかってどうあったのかをつねに思い出させ、自分の過去を捨て去ることを妨げてきた。

コールの著作には、脊髄損傷によって車イス生活をヨギ(注4)なくされても、新しい自分の状況を受け入れ、いきいきと暮らしている人や、むしろ以前よりも社会的に活発になった人の事例もあげられている。これらの人に比べると、ボブは、生活のあらゆる側面で問題を抱えるようになった。コールは、慢性痛の破壊的な影響をこう述べている。「彼〔ボブ〕の結婚生活、家族、仕事、社会的な人間関係、自尊心に対してこれほど破壊的だったのは、痛みなのだ。それは、集中力、社会性、人間関係、収入を破壊した。痛みは、目に見えない仕方、ボブ自身を浸食してしまったのだ。四肢の麻痺は人生の邪魔をしないが、おそらく痛みは人生の邪魔をしている」。

慢性痛が続いたのは、cからである。彼は新しい身体とそれがもたらす世界とに和解することができなかった。そして今度は、認められない新しい身体が報復するかのよう、疼痛が彼の生活を破壊する。身体図式は、単なる全身像ではない。それは、全体的なシステムとしての身体が、世界とどのように関わっているかの表現である。自分の身体の変化によって、自分をとりまく世界が自分に何をアフォード(注5)してくるかが変わる。よって、自分の身体が変わるときには、世界との関わり方も変えなければならぬ。世界が変わるときには、自分の身体も変えなければならぬ。自分が変化するということは、世界が違ったありさまで私に与えられるということであり、私をとりまく他者も異なった接し方を自分にしてくるということである。この自分の身体と世界の全体的な変化の上に立って、私は新しい生き方を構築していかなければならない。身体図式とは、私たちの存在が身体全体によって環境とインタラクション(注6)していることの証である。幻肢は、身体図式と世界とのインタラクションが激み、停滞してしまったことから生じてくる。熊谷は、この世界とのインタラクションを信頼できる医師との出会いを通して、再開できた。そうして慢性痛は消失した。だが、ボブははまだ世界への信頼を回復できていない。

変化を拒否し、以前の自分の身体に執着する態度は、以前の痛みから報復を受ける。幻肢は、私たちの身体全体がつねに環境

と交通し、インタラククションしているという事実を裏側から表現している。慢性痛は、身体全体としての私たちの存在が過去の危機から脱していないことの表現である。慢性痛の対象とは、急性痛のように身体の特定箇所のことではない。それは身体全体、すなわち、私たちの存在全体を対象としており、慢性痛はその危機の表明なのである。慢性痛は、誤った痛みである。「誤った」というキハンの<sup>(\*)</sup>で評価的な言葉を痛みに使うのは、慢性痛が、損傷箇所がもはやないにもかかわらず存続しているという理由だけではない。それは、「原因」なく続く痛みが、患者を世界から引きこもらせ、人生を停滞させ、悪循環の中に患者を閉じ込め続けているからである。

(河野哲也 「境界の現象学」一部改)

(注) 1 スキーマ … 知識・認識の枠組み。

2 メルロ＝ポンティ … モーリス・メルロ＝ポンティ(一九〇八～一九六二)。フランスの哲学者。

3 媒質 … 物理的作用を他へ伝える仲介物となるもの。

4 コール … ジョナサン・コール。英国の臨床生理学者。

5 アフォード … 与えること。

6 インタラクション … 相互作用。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
5

(ア)

タイナイ

1

- ⑤ 秘書をタイドウして出張する  
 ④ 新しい学説のタイケイを樹立する  
 ③ タイヘイラクを並べる  
 ② タイガンの火事  
 ① カンコツダツタイ

(イ)

カレイ

2

- ⑤ コウゲンレイシヨクすくな鮮し仁  
 ④ ヒレイを重ねる  
 ③ 早起きをレイコウする  
 ② バレイを重ねる  
 ① レイケンあらたか

(ウ)

イゼン

3

- ⑤ イフの念を抱く  
 ④ イシンデンシン  
 ③ シイを巡らせる  
 ② 親にイゾンする  
 ① イロウなくやり遂げる

(エ)

ヨギ

4

- ⑤ ジギを得た発言  
 ④ 雪道を行くのにナンギする  
 ③ 被災地にギエンキンを送る  
 ② 彼はまったくのギゼンシャだ  
 ① その証言にはギギがある

(オ)

キハン

5

- ⑤ 銀座にキカン店を出す  
 ④ 海外進出をキトする  
 ③ 今週のシンキ感染者はゼロだ  
 ② 社会のフウキを乱す  
 ① 白をキチヨウとした明るい部屋

問2 傍線部A「慢性痛はなぜ生じるのだろうか」とあるが、筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 慢性痛は、脊髄損傷の可能性によるものと考えている。
- ② 慢性痛は、運動能力の後退によるものと考えている。
- ③ 慢性痛は、幻肢によるものと考えている。
- ④ 慢性痛は、身体図式の機能不全によるものと考えている。
- ⑤ 慢性痛は、全体的なシステムとしての身体が世界とのインタラクションに執着することによるものと考えている。

問3 空欄 a に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 身体感覚と運動をシステムティックに連動させることができず
- ② 自分の運動を制御することができない場合に
- ③ 自分の願望を無意識の中に押さえ続けることにより
- ④ 以前の身体図式が更新されない場合に
- ⑤ 対象へと向かう身体的な志向性を失い

問4 空欄 **b** に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。ただし、空欄 **b** は二箇所

ある。解答番号は **8**。

- ① 抑圧
- ② 信頼
- ③ 報復
- ④ 誤知覚
- ⑤ 破壊衝動

問5 空欄 **c** に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **9**。

- ① ボブの結婚生活に問題があった
- ② かつての肉体と運動力を奪われた
- ③ 身体図式と世界とのインタラクションが激むことにより、以前より障害が重篤になった
- ④ 自分をとりまく世界が自分にアフォードしてくれるものがなくなった
- ⑤ ボブが以前の男らしい自己像を捨てることができなかった

問6 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① メルローポンティは、身体をもつとは、或る生物体にとって、一定環境に適合し、幾つかの企てと一体となり、そこに絶えず自己を参加させてゆくことだと定義づけているが、幻肢が身体図式の機能不全に起因するものであるとの考えと理論的に親近性がある。
- ② 熊谷晋一郎は、自身の経験から、脊髓損傷が慢性痛の原因であるのと同様に、脊髓損傷の可能性も慢性痛の原因になりうることを証明しているが、それは、後に、心理的問題が慢性痛の唯一の原因であると一般化されている。
- ③ 身体図式とは、さまざまな感覚と運動が全体として共同に働くダイナミックなスキーマのことであるが、それは、人間だけではなく、ロボットにも一般的に備わっている。
- ④ 慢性痛同様、幻肢は誤った痛みであり、生活を破壊するが、他人の力を借りずに、みずから世界との関わり方を変えない限りは、そこから脱することはできない。
- ⑤ 熊谷晋一郎が小児科医としての経験をもとに慢性痛を治癒していったのに対し、ボブは軍人にすぎず、医者としての経験がなかったことが災いして、慢性痛の治癒に苦勞した。

## 第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点50)

(注1) eラーニングに関する議論の中で、しばしば耳にする意見は「顔を合わせた授業でなければ効果的な学習は無理」というものである。

**a** 従来、本当に役に立つ講義は教室で先生から直接学ぶものだと考えられてきた。教室という場の雰囲気、先生の生の声、周りの同僚たちのささやき、そしてしばしば起こる予想外のハプニング。その雰囲気の中に我が身をおいてこそ、本当の学びは成立するのである。そして、ドレイファスも指摘するように、eラーニングは**b**がケツジ(7)したサイバースペースにおける学習であり、リアリティのある効果的な「学び」は期待できないのかもしれない。

しかし、一見疑いのないこの見解は、二一世紀においても絶対に正しいことなのだろうか？ 私たち大人にとっては正しいと思えることでも、生まれたときから目の前にコンピュータが空気のように存在していたこれからの子どもたちにとっても正しいとは限らないのではないか？

例えば、グーテンベルクが「印刷技術」を発明したときのことを想像してほしい。一番最初に印刷したのは「聖書」だったというが、これに対しカトリック教会や多くの信者から激しい批判があったらしい。手書きの聖書の方がキリストの教えをより正しく伝えている尊いものだ、という批判である。しかし、現在を生きる私たちは、そのような批判を「ばかげている」と考えるだろう。写し間違いがある手書きの聖書よりも、間違いなく知識を伝えてくれる印刷された聖書の方がずっとよいと考える。さらに、より多くの人々にキリストの教えを伝えるには印刷された聖書の方が都合がよいと考えるだろう。

コンピュータやインターネットを用いて学ぶことは、現在のところクシユ(4)なことと考えられている。しかし、あと数十年もたてば、eラーニングはごく日常的な学習スタイルになっているかもしれない。子どもたちが、ものごころついたときからインターネットで学ぶことが当たり前になったとき、ネット上のサイバースペースにこれまでとは全く異なるリアリティを持つた「学びの場」ができるかもしれない。そして、子どもたち自身が、これまでとは全く異なるリアリティを持って、サイバースペースを「学びの場」とした学習を行っているかもしれない。

また、確かに現在、eラーニングではリアリティのないバーチャルな「知」を扱うことが多い。しかし今後は、バーチャルな世界とリアリティのある世界の境界線があいまいになってくることも考えられる。二〇世紀・工業化社会では「モノ」という概念が絶対的であり、その意味において物理的空間があるか否か、つまりバーチャルリアルかの区別もはっきりとしていた。しかし、高度情報化時代になり「モノ」という概念がそれほど強力なものではなくなってきた。その代わりに「情報」という、とらえどころのない概念が支配的になりつつある。そこでは、どこまでがバーチャルでどこからがリアルであるかはもはや意味を持たなくなるかもしれない。さらに言えば、バーチャルな体験から得た知識と実際の体験から得た知識の差が、ほとんどなくなるかもしれない。さらに、その差を問うこと自体が意味をなさなくなるかもしれない。

数十年後、子どもたちにとってサイバースペースがもうひとつのリアルな世界になり、インターネットを活用した「学び」という新しいリアリティが発生する可能性は否定できない。少なくとも、そのような可能性を頭の中においた上で、「学び」というものについて考えていくことが今後必要になってくるだろう。

受験勉強にあけていた頃、目の前に山積みにされた教科書を眺めながら「これさえ覚えれば大学に入れる」と自分に言い聞かせていた。その教科書の何割を覚えることができたのか全く定かではないが、取りあえずその範囲内の学習を行い、希望の大学に合格することができた。

受験勉強は、学習しなければならぬ範囲が決まっていた。その範囲だけ学習すれば、自分の目的を果たすことができる。しかし、人生というものに学習の範囲はない。自分のやる気だけで、学習の対象となる範囲は無限に広がっていく。一昔前は、その範囲が広い人ほど知識人、あるいは<sup>(7)</sup>ハクガクとして尊敬されていた。

そして、これまでの教育や「学び」には大原則があった。正しい知識を簡単なものから複雑なものへ、ひとつひとつに積み重ねていけば立派な人間になれる——という前提である。これは学校教育に限らず、私たちがよりよく生きていくための「学び」の大原則としても広く受け入れられてきた。この原則の背景には、世の中には必ず正しい知識あるいは正解というものが存在するという思い込みがある。たとえ今、自分は知らないとしても、どこかに真実がきつとあるはずだ。だから

からこそ、一所懸命勉強して正しい知識を獲得し、それらを積み重ね、そして真実を見つけださなければならぬ。私たちは、今までこのように考えてきた。

知識人とはたくさんの正しい知識を蓄積している人のことを意味したし、ビジネスを成功させるためには可能な限り多くの関連する知識を学ばなければならないとされた。そして、子どもを持つ親は、我が子が有名大学に入学し最先端・最高水準の知識を学ぶことを望んだ。

このように見てくると、これまで私たちはひとつの枠組みで「知」というものを捉えてきたことがわかる。ひとつの情報があるとする。それは、正しいか間違っているか……つまり、ふたつにひとつの明確な判断が可能なものである。そのような情報は積み重ねることもできるし、系統的に分類することもできる。間違った情報は無視したり捨ててしまい、正しい情報だけ受け入れればよいのである。

ところが、現在は高度情報化時代。私たちの周囲を取り巻く情報の量は莫大で、常に増大している。しかも、情報化社会はあいまいで複雑である。さまざまな情報が複雑に絡み合っており、また情報間の境界も見えづらぬ。あるいは、常に情報の意味やその情報自身の変化が続いている。ある時には正しかった情報が、次の瞬間には間違ったものとなる。「正しいとも言えるし、正しくないとも言える」という場合すらある。これまでの教育ではこのような情報は極力排除され、正しい知識だけが重視されてきた。特に、学校教育では間違ったことは教えられないし、正しいかどうか分からないことも取り扱うことは避けられてきた。

そのような高度情報化時代の教育は、二〇世紀の工業社会における教育とは必然的に異なったものにならなければならない。確かに、二〇世紀の工業社会では、「世の中には必ず正しい知識あるいは正解というものが存在する」という考え方が正しいように思えた。そして「正しい知識を簡単なものから複雑なものへ、ひとつひとつ c に積み重ねていく」という教育が、社会にとって好都合だったと言えるかもしれない。

しかし現在、私たちの周りでは、そのような教育の欠陥がいたるところで表面化している。例えば、学びの場であるはずの「学校」で、「いじめ」や不登校、学級崩壊が問題視されてから多くの時間が経過した。その間さまざまな対処策が<sup>(x)</sup>ケントウされ

実際に実行されてきたが、どうもいまいち効果は感じられない。

そろそろ教育や「学び」に関して、少し本質的なところからケントウし直す時期にきているのかもしれない。これまでの「正しい知識を簡単なものから複雑なものへ、ひとつひとつ」に積み重ねる」という常識をイッタン白紙(\*)に戻した上で、改めて二一世紀の高度情報化社会における教育や「学び」を考えなくてはならない時期にきている。

(渡部 信一 「ロボット化する子どもたち」 一部改)

(注) 1 eラーニング : インターネットなどの情報技術を利用した学習形態。

2 ドレイファス : ヒューバート・ドレイファス(一九二九〜二〇一七)。アメリカの哲学者。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

11  
～  
15。

(ア)

ケツジヨ

11

- ⑤ 銅像のジヨマク式  
④ ジヨサイない受け答え  
③ 壮大なジヨジシ  
② 事件のジヨマク  
① ゆっくりとジヨコウ運転する

(イ)

トクシユ

12

- ⑤ その説にはシユコウできない  
④ シユセンド  
③ 地方行政をシユカンする  
② シユギヨクの短編集  
① シユシヨウな心がけ

(ウ)

ハクガク

13

- ⑤ ハクアの殿堂  
④ ボクシング界の名ハクラク  
③ ハクライの珍しいおもちゃ  
② カジンハクメイ  
① ハ克蘭キョウキ

(エ)

ケントウ

14

- ⑤ ケンガクに励み合格した  
④ 入国者のケンエキを行う  
③ ケンニンフバツ  
② 大国にヒケンする経済力  
① ジャケンに扱う

(オ)

イッタン

15

- ⑤ 一年の計はガンタンにあり  
④ タントウチョコクニユウに質問する  
③ キョシンタンカイに意見を聞く  
② 公平性をタンボする  
① タンセイな顔立ち

問2

空欄

**a**

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

**16**

。

① 例えば

② 確かに

③ あるいは

④ というのは

⑤ すべからず

問3

空欄

**b**

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

**17**

。

① 倫理性

② 日常性

③ 絶対性

④ 身体性

⑤ 可能性

問4 傍線部A「バーチャルな世界とリアリティのある世界の境界線があいまいになってくる」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① eラーニングが日常的なものとなることで、サイバースペースがリアルな世界にとってかわり、リアルな教育の場を駆逐していくということ。
- ② eラーニングが日常的なものとなることで、これまでのサイバースペースと異なるリアリティを持った「学びの場」ができるということ。
- ③ eラーニングが日常的なものとなることで、バーチャルな体験から得た知識と実際の体験から得た知識の差がほとんどなくなり、その差を問うことが意味をなさなくなるということ。
- ④ eラーニングが日常的なものとなることで、リアリティのないバーチャルな知とリアリティのあるバーチャルな知が混在するようになるということ。
- ⑤ eラーニングが日常的なものとなることで、サイバースペースがもうひとつのリアルな世界になり、リアルとバーチャルの意味が曖昧になるということ。

問5 空欄 c に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。ただし、空欄 c は三箇所ある。解答番号は 19。

- ① 積極的
- ② 直線的
- ③ 系統的
- ④ 指数関数的
- ⑤ 幾何級数的

問6 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 高度情報化社会においても、「世の中には必ず正しい知識や正解が存在する」と一般に考えられている。
- ② 二一世紀の子どもたちは、生まれたときから目の前にコンピュータが空気のよう存在していたので、これまでとは異なる現実感を持っている可能性がある。
- ③ 二〇世紀の工業社会は、正しい知識や正解が存在することを前提とした教育を行ってきたが、その前提が崩れてしまったことが原因で、教育の欠陥が表面化し、「いじめ」や不登校の問題が出てきた。
- ④ 正しい知識や正解を積み重ねていけば立派な人間になれるという大原則は、eラーニングが日常的なものとなったとしても変わることはないと考えられている。
- ⑤ 常に情報の意味やその情報自身も変化する現代においては、柔軟性が何より重要であり、eラーニングが期待されているのも、その柔軟性ゆえである。

